

15

令和3年8月

岩手大学教職大学院

NEWS Letter

岩手大学大学院 教育学研究科 教職実践専攻

国立大学法人
岩手大学「教育実践研究の成果」を更新して公開中
教職大学院ホームページにてご覧いただけます！<https://www.edu.iwate-u.ac.jp/master/>岩手大学大学院教育学研究科研究年報
オンラインISSN 2432-924X

問合先：岩手大学教育学部

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18番33号 TEL.019-621-6504 FAX.019-621-6600

E-mail edujim@iwate-u.ac.jp URL <https://www.edu.iwate-u.ac.jp/master/>

- 板井直之・清水将(2021)愛好的態度の形成につながる「体づくり運動」の単元開発
- 若松優子・鈴木久米男・多田英史(2021)校内組織をいかすOJT推進の手立てー育成指標を踏まえた研修ツール開発ー 他22編掲載

教育実践研究・中間発表会

M2 熊谷修平

[学卒院生、授業力開発プログラム]

大学院生活の集大成ともいえる修論執筆に向けて、大学院の授業を受け、修論テーマを決め、先行研究を読み、授業実践を行ってきました。その進み具合を発表し、他の院生や教授陣から貴重な意見を頂いて研究に活かす場として中間発表があります。質の高い、次に繋がる助言を頂くために、私たち発表者もしっかりと準備をする責任があります。

M2 佐々木良一

[現職院生、学校マネジメント力開発プログラム]

『「中学校における復興教育の現状と課題」復興教育の現状を踏まえた教育課程の提案』をテーマとし、研究を進めています。昨年度、県下の抽出中学校に復興教育についてのアンケートを実施し、10年目を迎える復興教育の現状と課題を分析し、その課題の方向性を示せればと考えています。中間発表ではこれまでの取組を多くの方に評価していただき、岩手の教育に少しでも資する研究をさらにすすめていきたいと考えます。

「授業力開発実習」での学びと手応え

M2 鳴原悠介

[学卒院生、授業力開発プログラム]

授業力開発実習を通して様々な教科の授業を経験する中で、児童の実態を把握しながら意図的指名を取り入れたことは、大きな学びになりました。しかし、その発言をつないだり、昨年からの実習の課題である発問の吟味や板書構成は、さらに改善していくべきだと感じました。一つだけでなく、第2、第3の手を準備しておくことも必要です。



実習で子どもと向き合う鳴原悠介さん

「学校マネジメント力開発実習」での学びと手応え

M2 石田克幸

[現職院生、授業力開発プログラム]

今年度初め、指導主事会議への参加や県教育委員会での体験実習など、貴重な学びの機会をいただきました。学校や地域のニーズの把握、最善の提案に努める教育行政は、目標達成に向けて寄り添いながら協働する、身近で頼りになる機関であること、ゆえに果たすべき役割が大きいことを、実習を通して学ぶことができました。

教育学研究科教員 メッセージ

研究者教員 清水 将

教職大学院は、理論と実務を架橋した教育を行う高度専門職業人養成に目的を特化した専門職大学院として、新たに創設されました。理論と実践の往還や融合を目指す一方で、教える、教えられるという古典的な教育の枠組みを超える制度となることにも期待がかけられています。研究や実習における実践、その中心となる振り返りによって人を成長させることを大切にしています。振り返りは、組織学習、言い換えれば組織の問題を解決する手段と捉えることもできます。組織学習の成果は、伝承されていくことに特徴があり、有用な技や知を見出し、後生に伝えていくことが教職大学院の学びとなります。

教職大学院は、大学だけでなく、附属校・協力校などを含めた実践の共同体です。自分がその中で何ができるかを考えることによって、習得を超えた学びを実感してこそ意義を持ちます。教育という共同体を変革してゆく主体的な存在になりたい人をお待ちしています。

教職大学院の日々

M1 本宮大千

[学卒院生、授業力開発プログラム]

教職大学院に入学して約4ヶ月が経過しました。入学当初は、慣れない環境ということもあり緊張していましたが、現在は、講義や演習を通して学卒の同期や現職の先生方と学びを深め、充実した日々を送っています。今後も、意欲を高めていくとともに、教員としての力量を形成していけるよう努めていきたいと思っています。



復興教育の現状と課題を発表する佐々木良一さん

M1 鈴木智行

[現職院生、学校マネジメント力開発プログラム]

私たち現職院生は、学卒院生とともに「理論の実践化」「実践の理論化」の両面を往還・融合させながら学んでいます。特に、経験豊富な大学の先生方から日々ご教授いただきながら、様々な校種の現職院生及び学卒の大学院生と多くの意見交換ができる学びのスタイルは、新たな視点への気づきや知識の深まりにつながっています。